
プレシャスワールド

ユマニテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレシヤスワールド

【Nコード】

N4666V

【作者名】

ユマニテ

【あらすじ】

玻璃はゲームの世界に入ってしまった。そこはゲームの300年前、エルフとなった玻璃は契約を結んだ人と共にゲーム開始時まで生きられるのか。主人公最強、逆ハー、魔法がヤバイ。

ブローグ

ふと、閉じていた目を開くと、眼前に映るは緑豊かな場所だった。

木があり、岩場があり、近くには小川でも流れているのだろう、サラサラと水の音が聞こえる。

どこかで見たような、しかし見覚えの無い景色。

視線を落してみると、自分は白いローブを着ていた。はて、自分はローブなど着ていただろうか。

どうやって此处まで来たのか、いくら考えても答えは出てこなかった。

何故自分は此处にいるのか、何故自分はこんな格好をしているのか、何故自分は

存在シテイルノカ。

《チヨロイ》

『なんて考えてみるけど、さっぱり分からん。何処だよ、此処は』

もしかしてコレって記憶喪失ってやつか、いやいや落ち着け。思い出せ、オレ！

オレの名前は高嶺^{たかね} 玻璃^{はり}、女の子みたいな名前って言なよ、気にしてるんだからさ、母さんがもっと男っぽい名前にしてくれていたらオレの身長ももっと伸びて、いや、そもそも父さんが止めて……無理だな、かかあ天下だし。

歳は17歳、165センチの45キロ。顔はこの通り女顔、って今、顔を触って気付いたんだけど。

『耳、とんがってねえか？』

そう、オレの耳、耳がとんがっている、これじゃあエルフじゃねえか、ん？ エルフ？ エルフ！？

まさか此処ってゲームの中！？ ってことは

『あー、あー……はあ、声もクリスかよ』

まあ、これで何となく分かったことがある、オレはクリスという名のキャラクターの姿をしている筈だ。

見た目17歳前後の1735歳、170センチの47キロ、エルフらしい中性的な美人、このゲーム、プレシヤスワールドでは珍しい黒目黒髪、のハズ。

オレは肩甲骨の辺りまであるくせの無い、手触りの無い黒髪をつまみ上げて目の前に翳し、確信を得た。

『間違いねえな、クリスだわ、つーことはアレか、魔法使えたりすんのかよ。魔法……それいいな』

よーし、一発やってみつか。

右よーし、左よーし、右よーし、上空よーし、ついでに後ろよーし。目標は10メートル先の岩場。

ヤルか。

『安全性を考えて………』《ファイアボール》

ボツ………ドカン！

あんれえ？

オレの翳した手から放たれた手のひら大、20センチ程の火球が狙いどおり岩にぶつかり弾けた。

そこまではいい、いいんだ。

ただ………

『岩が半壊ってどうなんだ………』

ぶつけた岩に近付いてよくみると表面がボロボロになっていた。なるほど、熱ではなく、ぶつかったときに生じた爆風によって弾けた

ようだ。

にしても、一発で発動するなんて

『けっこう簡単なんだな。』

「何が簡単なんだ？」

『そりゃあ、魔法……って、うわあ！ 誰！？』

つーより、どこから湧いてきたんだ、さっきまで誰もいなかったぞ！？

「ん？ 人の名前を訊くときは自分から、まあいいか、オレはブラウ、人間の冒険者さ。お前は？」

どっちの名前を名乗るべきかな、外見がクリスなんだからクリスでいいよな？

『オレは、オレはクリス、エルフだよ』

エルフだと言うとブラウはしげしげとオレの尖った耳を見つめた、そして腰を屈めてオレと同じ目線にしてオレの瞳を覗き込んできた。

ブラウの瞳に映るオレはどこか庇護欲を掻き立てる不安そうな顔をしていた。もともと童顔のクリスはその様子も相まって15歳位に幼く見えた。

にしても、背が高いな、分ける。

ブラウの身長は目測だが180センチは確実に越えているだろう。歳は18、19ぐらいか、程よく筋肉もあつて頼れるアニキって匂いがプンプンする。

「なあ、お前、一人か、冒険者でもないエルフがこんなところに一人つてえのはちょっとばかし危なくないか？」

さつきから言う冒険者ってのはなんだ？

『冒険者って？　ていうか、此処どこ？』

「は？　冒険者を知らないのか？　しかも此処が何処かも分からないって、お前、記憶喪失か？」

んなこと言われてもイキナリこんなとこに現れたんだし、マップ機能も使えなかったし、とりあえずそういうことにしておいた方が都合がいいか。

『うん、名前とか魔法とかそれくらいしか憶えてないんだよな。』

なあ、ブラウは旅をしているのか？』

「あ、ああ、冒険者ってのは冒険者ギルドに登録した奴のことだからな、色々渡り歩いている」

『じゃあ、オレも連れてつてくれよ。記憶を取り戻すために旅をしたいんだけど一人じゃ不安だろ？　魔法使えるから役に立つハズだぜ？』

んでもって、下から涙目で見つめる、服を掴むアクセントも加えた。

これで落ちるはず、ブラコンの兄貴は落ちたぜ。

「う、わーったよ、連れてってやつからそんな目でオレを見てくれるな！ 頼むから！」

犯罪者にはなりたくねえ！」

フツ、チヨロイな。

『本当か！？ アリガトな！』

内心そんなことを考えているなんて微塵も顔には出さずにオレは無邪気に喜んでブラウに抱きついてみせた。

「くそう、これだからエルフは苦手なんだ、人を散々魅了しておいて無自覚なんだからな！」

誘惑に負けてオレの頭を撫でつつブラウは叫んだ。

残念、オレは故意にやっています。

《セツメイ》

「ここはエムロード大陸さ。緑豊かな精霊の集う大地。」

エムロード、たしかフランス語でエメラルドという意味だったよな。大陸の名前が一緒ってことはやっぱりゲームの世界か。

オレとブラウはオレが破壊した岩に腰を落ち着けて、ブラウからしたら当たり前のことを話し合った。

問題は同じ年代かってことなんだよなあ。

ゲームでは神暦1005年だったハズ、神暦1000年からゲームが始まったからな。どれだけ時が経って、もしくは戻っていることやら。

『なあ、今は神暦何年なんだ？』

するとブラウはそんなことも忘れてしまったのかと気の毒そうにオレを見つめてきた。

悪かったな、記憶喪失で！ 違うケド。

「ああ、今は神暦705年の四月、二十八日だな。」

マジかよ、嘘だと言ってくれ、ジャスト300年前なんて。

ゲーム開始時にはオレ死んでるんじゃ、いや、身体はエルフだから、

見た目はあまり変わらないのか？　この身体はたしか1000年は越えてるしな。

よし！　じゃあ気楽に300年生きるか、ん？　開き直りすぎじゃねえって？　なんか精神が身体に引き摺られてるみたいだな、クリスという身体にとつて300年は肉体年齢にしてわずか三年足らずってこと。だからへらへら出来るんだろうな、それはそれで問題だけど今は感謝だ。

しかし、エルフは能力値が高い代わりに成長遅いな。玻璃としてしていたこのゲームの時も思ったけどさ。

プレシヤス・ワールドというゲームは他とは少し違ったレベルアップ制をしているんだ。普通レベルアップっていったらモンスター倒して、経験値貯めて、一定値超えたらレベルアップ、イエーイ、だろ。

それがプレシヤス・ワールドでは違うんだよなあ、コレが。なんとプラスして日数が必要になるんだよ。

レベル20までは普通にどんな人間でも、エルフでもレベルが上がるんだよ、でも、それ以降は種族差つてのがあるんだ。それがもうエルフはめちやくちやめんどくさい。

人間の場合は一日に二つまでレベルが上がる、獣人で一日に一つ、二番目に遅い竜人でさえ三日に一つなんだが、エルフは七日に一つという驚異的な遅さだ。もう、最初の頃とか苛つくし、恥ずかしいし、ハンパなかった。

オレと違って堪え性の無い現代っ子は早々にそれが分かると人間や獣人にチェンジしてしまうんだ、だから慢性的にエルフは数が少ない。

でも、考えてみるよ、レベルが上がっていけば必然的にレベルアップする速度は当然減少するしかねえだろ。長期的にプレイすることを考えれば、たとえ初期の成長が遅くても、他を圧倒する魔法が使えるエルフならば工夫次第によっては十分カバーできる範囲なんだ。

ましてや、オレのように高レベルになれば、もはやパーティー戦においては敵無しだ。仲間に足止めを頼んだりしてトリガーハッピーならぬマジックハッピーとなる、正直ヤバイくらい楽しい。

ソロのときだって、体力多いのや防御力の高いモンスターを召喚して、壁にして、その間に魔法を使ったり、ぶっちゃけオレに敵はねえ、状態になるんだよな、エルフって。何故、皆気付かねえんだ？

まあ、気付いたとしても他よりも経験値も日数も必要だからある意味等価交換ってことで当然っちゃあ当然なんだなあ。マル秘だけどエルフだけが出来る経験値の荒稼ぎ方もあったりするけど。

ちなみにオレは現在レベル282、五年もやってたらそんなぐらい上がった。エルフとしたら、間違いなくトップレベル、もしかしたら一番かもしれない。

しかも前から溜まっていたのか、この前大型イベントとかでそのマル秘荒稼ぎしたからレベルあと20ぐらい上がりそうなんだよ、実は。

ポイントをどこに振り分けようかなあ、とか思ってたところにコレ

だよ。オレ、イン、異世界、たぶんプレシヤス・ワールド。正直マ
ージィでーすーかーと言いたい、むしろ言わせろ。

有り得ないことは有り得ないってどっかの誰かが言ってたけど、そ
れこそ有り得ないだろ。いや、ホント。

もう、ブラウには当分頭が上がらないな。

『へえ、そんなことがあったんだ、大変だなあ。』

「そうだろ？ まさか支払いを踏み倒されるとは思ってもみなかつ
たな、だから冒険者ギルドに入っただ。もうあんな羽目になるの
はこりこりだからな。」

いつの間にか話はブラウの武勇伝やギルドに入りたいきさつなどに
なって、大人しく聞いてみたけど意外と話は面白かった。特にワイ
バーンに襲われた時とかが笑いを誘って爆笑物、実際は恐ろしいん
だろうけどな。

『ところで、これからどこに行くんだ？』

「ん？ そだなあ、エムロード大陸の西にあるリュビ大陸に向かう
のさ。あっちはここより暑いけど、大丈夫かあ？」

うえ、暑いのかよ、でもたしかリュビ大陸は温泉が有名だったよな。
やった、オレってば無類の温泉好きだからノってきたかも。露天風
呂とかもう死にそう。

『平気！ オレ温泉好きだから。我慢できる。』

「そりゃあよかった、暑さに弱かったらどうしようかと思ってたんだ。」

……………オンセンってなんだ？」

その時浮かれていたオレにブラウの言った最後の言葉は届いていなかった。

ちゃんと聞いていればオレはそこまでショックを受けなかっただろうに、チクシヨウ！

《シホタル》

それから一週間、オレはひたすらブラウから世情と魔法について教わった。勉強は好きではないがこの世界ではウソのようなホントの話ばかりでちつとも苦ではなかった。

魔法の方は相変わらず、発動はするのだが、どうやら魔力が多いせいで、どうしてもコントロールが効かずに規模がでかくなってしまったようだ。

そこで純粋な魔力の球を造り出し、小さくしたり大きくしたりしてコントロールの練習をしている。これがまた思ったよりムズい。小さくしても圧縮しているだけだと言われたり、爆発しかけたり、四苦八苦している。

とはいえ、今はなんとかそれなりに出来るようになったはずだ。

……タブン。

「いいか、よく狙えよ、落ち着いて……やれ。」

『うん。《ファイアボール》』

狙い違わずオレの放った火球は吸い込まれるように対象のモンスターに当たり、爆発した。肉片が飛び散ることもなく、きれいにこんがりと焼き上げて火は消えた。

よし、コントロールも出来ている、後はもっとピンチの時でも使えるようになるば……

ポンポンとオレの頭を撫でてブラウがそつのたまった。

「よしよし、よくやった。流石はオレ、教え方が上手かったおかげだな。」

オイ、ちょっと待て。

オレがこの一週間教わったことといえば、同じ量の魔力で造った《ファイアボール》を百発空に向かって撃て、ただし間違えたら初めからやり直し、だの、魔力の球を維持したまま寝ろ、だの大雑把感覚に頼るようなものだったぞ。学問的見地からの教えなんてものはちつともなかった。

それでもか!?

と大いに不満を抱いたオレがいきなりブラウを殴ってしまったのも……まあ仕方がない、ことだよな。

「テテテ、いつてえなあオイ。でもちゃんとコントロール出来るようになったんだからいいだろ。あん？それとも手とり足とり教えて欲しかったのかい？」

そう言ってブラウはニタニタとこっちに向かって来た。ハッキリ言おう。

『エロい、キモい、コワイ、来んな、こっち来んなあ！ひあっ!？ちよっ、やめっ、触んなあ！』

……いい加減にしがれこのエロ親父い！」

「ぐあっ！」

『……あ』

思わずオレはわき腹をくすぐってくるブラウの腹にむかって全力で強烈な右手ストレートを繰り出していた。ヤベッ！

モロに食らったブラウは5メートルほどぶっ飛ばされ木に当たりずるずるとくずおれ、そのまま動かなくなった。

いくらオレが物理攻撃力が全種族中最弱のエルフだったとしても、高レベルのオレともなればそれなりの威力を持っているはずだ。

ともすればオレはブラウを殺してしまったかもしれない、どうか生きていてくれよ！

そう思いながらオレはブラウへと駆け寄って抱き起こした。

『ブラウ！ 今治すから！ 死ぬな！「や、生きてるから。」《リカバー・コンプリート》！ え？』

パニックに陥りながらも傷を癒そうと魔法を使おうとするが、その前にブラウの声が聞こえた気がして、唱えた後にまたパニックになった。

そんなクエスチオンマークを大量に飛ばしているオレを置き去りにして完成された魔法は効果を発した。ブラウの下に魔法陣が現れ、

淡い緑の光と共にブラウについた傷が消え去った。

『生きてる?』

「おう!」

『マジで?』

「このとおり、何だ、心配したのか? クク、こんな、涙まで流して。」

グイッとオレの目蓋を拭ってブラウは頭に手を置いてきた。オレは顔が熱くなるのを感じて見られないように下を向いた。

『べ、別にそんなんじゃないし! 泣いてなんかないし! 思い上がりも甚だしい、勘違いすんな!』

必死になって訂正しようとするが、ブラウはクスクスと笑うばかりでまったく取り合ってくれなかった。

違う! オレは泣いてねえ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4666v/>

プレシャスワールド

2011年8月17日12時02分発行